

## 学校評価アンケートの回答結果の人数についての有意差検定

人数に有意差があるということは、統計的に差が偶然ではないと判断されることを意味する。この差が、中学校の教育によるものなのか、保護者の教育、小学校での経験、経済的背景、地域の文化的特性などによるものなのか等を明確にすることはできない。しかし、アンケートや評価などでネガティブな回答が多い項目や、生徒、保護者、教師間で意識の違いが明らかになった項目を特定し、それらの項目を教育改善のための課題として扱い、重点的に取り組むべき点として設定するという考え方の下で、課題を焦点化するために統計的分析を行う。

	質問 1	質問 2	質問 3	質問 4	質問 5	質問 6	質問 7	質問 8	質問 9	質問 10	質問 11	質問 12	質問 13	質問 14	質問 15	質問 16	質問 17	質問 18	質問 19	質問 20	質問 21	質問 22	質問 23
<b>生徒</b>																							
C, D	48	41	33	49	7	12	21	12	82	85	70	141	49	49	53	41	15	59	15	43	14	32	101
A, B	164	171	178	163	205	199	190	198	130	126	142	71	162	163	159	170	197	152	197	169	198	180	111
	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
<b>保護者</b>																							
C, D	52	43	31	79	20	21	15	12	93	115	99	120	91	98	55	91	30	79	24	44	39	32	92
A, B	158	167	178	129	189	189	195	198	114	90	107	83	115	113	153	118	177	128	186	166	172	178	115
	**	**	**	**	**	**	**	**	*	*	*	*	*	*	**	*	**	**	**	**	**	**	**
<b>教師</b>																							
C, D	4	5	1	13	4	0	5	3	11	9	16	19	15	13	3	7	0	18	5	4	3	6	8
A, B	19	18	22	10	19	23	18	20	12	14	6	2	8	10	20	16	23	4	18	19	20	17	15
	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	*	**	**	**	**	**	**	*
	質問 1	質問 2	質問 3	質問 4	質問 5	質問 6	質問 7	質問 8	質問 9	質問 10	質問 11	質問 12	質問 13	質問 14	質問 15	質問 16	質問 17	質問 18	質問 19	質問 20	質問 21	質問 22	質問 23

## 分析・考察概要

### 質問1

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「人に注意されず、何事も自分で正しく考え、正しく行動している。」生徒が多いと言える。

### 質問2

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「学校や地域に貢献しようとしている。」生徒が多いと言える。

### 質問3

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「学校の行事に自分から進んで取り組んでいる。」生徒が多いと言える。

### 質問4

生徒と保護者の間ではA、Bの人数が統計的に有意に多い。一方、教師のデータでは有意差が認められない。しかしながら、D「30%未満の生徒が将来についてしっかりと考へている」と回答した教師が0人、C「60%未満の生徒が将来についてしっかりと考へている」と回答した教師が10人であることから、都農中学校の生徒の多くが自分の将来についてしっかりと考へていると見ることができる。

### 質問5

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「相手の考えを大切にしながら生活している。」生徒が多いと言える。

### 質問6

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「みんなと協力して学習や行事に取り組んでいる。」生徒が多いと言える。

### 質問7

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「誰とでもトラブルなく毎日の生活を送っている。」生徒が多いと言える。

### 質問8

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「自分も他者も大切にして生活している。」生徒が多いと言える。

### 質問9

生徒の間ではA、Bの選択肢を選んだ人数が有意に多いが、保護者と教師では有意差は見られない。都農中学校では、総合的な学習の時間を含め、新しいアイデアを考えるための多数の機会が設けられているため、生徒は何らかのアイデアを提案できる環境にある。このことから、生徒、保護者、教師間でアイデアの質や量に対する意識の差が生じており、特に保護者は家庭外での生徒の活動状況の把握が不十分であることもあり、保護者と教師間で有意差が見られなかつたと考えられる。ただし、保護者と教師もA、Bを選んだ人数の方がやや多く、新しいアイデアや解決策を考えている生徒が少ないとは言えない。

### 質問10

生徒はA、Bと回答した人数が有意に多い。一方で、保護者はC、Dと回答した人数が有意に多く、教師には有意差が認められない。教師に有意差が見られなかつた理由としては、都農のためになることを考へる機会の多い学年と少ない学年が存在したためではないかと考えられる。保護者に関しては、質問9と同様に、家庭外での生徒の活動状況の把握が不明確であることも原因であると思われる。都農町のためになることを考へる機会は総合的な学習の時間に設定されており、生徒の活動状況から、質や量に差はあるものの、多くの生徒が都農町のために貢献することを考えている。今後、さらに、保護者が学校の活動をよりよく理解できるように、学校通信やインスタグラムを通じて情報を提供することも必要ではないかと考える。

## 質問1 1

生徒の間ではA、Bという回答が有意に多く、一方で教師はC、Dという回答が有意に多い。保護者の回答には有意差が見られない。教科書や資料を読んで自分の考えをまとめられると感じている生徒について、教師の観点からはそのスキルが不十分な生徒が存在すると言える。これは、教師の指導が十分でない可能性や、生徒の評価基準が低いことを示唆している。効果的なまとめ方や不足しているスキルについての指導を強化する必要がある。また、学んだ内容を言葉でまとめる機会は多く設けられているものの、これらに対する具体的なフィードバックや評価を行う場が足りないのでないかと考える。

## 質問1 2

生徒、保護者、教師共にC、Dの人数が有意に多いことから、都農中学校の多くの生徒がフォーサイト手帳（生活の記録）をしっかりと記録し、活用しているわけではないと言える。フォーサイト手帳の指導については、1学期に重点的に指導を行い、当初はそれなりに活用されていたものの、徐々にその利用が減少してきた。メモを取ること、計画的に生活を送ること、目標をスマールステップで設定することは、社会に出たときに重要な情報活用能力となるため、来年度もこの取り組みを継続したい。改善策として、これまで紙媒体のフォーサイトのみを利用していたが、クラウド上での利用も可能なタブレット版フォーサイトを導入し、生徒に選択肢を提供する予定である。

## 質問1 3

生徒はA、Bと答えた人数が有意に多く、一方で保護者と教師の間では有意差が見られない。これは、目標に向けて計画を立てて行動していると自己申告している生徒たちの中に、保護者や教師が期待する実行力が不足している場合があることを示している。この差異の原因として、生徒の努力の内容や結果が保護者や教師の期待に満たないこと、または、生徒の計画や行動が保護者や教師に十分に伝わっていないことが考えられる。さらに、生徒と保護者・教師間で目標に対する期待が異なることも影響している可能性がある。例えば、教師や保護者が学業成績の向上を重視する一方で、生徒は自己成長や社会的スキルの向上に焦点を置いている場合がある。このような期待のズレを解消するために、フォーサイト手帳を活用して生徒が自分の考えを定期的に保護者や教師に報告すること、そして、生徒、保護者、教師が面談を通じて目標や計画、実施状況を共有する場を設け、意識の違いを埋める対話を促進すること等が考えられる。

## 質問1 4

生徒はA、Bと回答する者が有意に多い一方で、保護者と教師には有意差が見られない。『時間を有効に使って生活している』と自己申告している生徒に対して、保護者や教師からはそのように見えない場合があると言える。このギャップの原因の一つとして、生徒が趣味やゲーム、SNSの利用など自身の時間を有効に使っていると感じている活動が、保護者や教師には生産的でないと見なされている可能性がある。また、生徒が自分の目標に向けて効果的だと感じている時間の使い方が、保護者や教師が期待する学業成績などの具体的な成果に反映されていないため、非効率的と判断されることがある。解決策として、生徒、保護者、教師が共に具体的な目標を設定し、その目標達成のための時間の使い方を計画することが重要であると考える。さらに、フォーサイト手帳を活用して、生徒の時間管理を教師が確認し、その上で適切なフィードバックを提供することが考えられる。これにより、お互いの価値観を理解し、生徒の時間の使い方に対する認識を改めることができるのでないかと考える。

## 質問1 5

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「提出物や宿題の期限を守っている。」生徒が多いと言える。

## 質問1 6

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「自分の生活を振り返り、改善しようとしている。」生徒が多いと言える。

### **質問17**

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「授業にしっかりと取り組んでいる。」生徒が多いと言える。

### **質問18**

生徒と保護者の間ではA、Bと答えた人数が有意に多い。しかし、教師はC、Dの回答が有意に多く、家庭での学習（塾を含む）に対する認識の違いが明らかになっている。生徒や保護者は努力のプロセスや活動を直接見て評価しているが、教師は学校での成績や授業態度など別の指標を使用して評価しているため、成果の評価に差が生じていると考えられる。この結果、保護者や生徒が感じている努力の量や質が教師の期待するレベルと異なることが原因で認識の違いが生じていると考えられる。教師はより高い成果を期待していると考えらえる。改善策として、フォーサイト手帳を活用して生徒が自分の進捗を定期的に報告し、教師と生徒が共に目標を設定し、それに対する期待を明確にするための相談の機会を増やし、さらに学力向上対策を強化するとよいのではないかと考える。

### **質問19**

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「ルールやマナーをしっかりと守って生活している。」生徒が多いと言える。

### **質問20**

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「体力を向上させることができている。」生徒が多いと言える。

### **質問21**

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「感染症の予防を心がけている。」生徒が多いと言える。

### **質問22**

生徒、保護者、教師共にA、Bの人数が有意に多い。したがって、都農中学校は「災害時あるいは災害が起りそうな時に、適切な避難行動をとることができる。」生徒が多いと言える。

### **質問23**

全体として、生徒、保護者、教師の間での回答に有意差は見られない。しかし、3年生に限定すると、A、Bと答えた人数が生徒、保護者、教師の間で有意に多くなっているので、今回の結果は、総合的な学習の時間の経験に起因していると言える。各学年での経験を積み重ねて、最終的には「都農町のためになることを実践している」生徒が多くなると言える。

## 今後の学校での取組のまとめ

### 1 フィードバックと指導の強化

生徒に対し、具体的かつ実行可能なアドバイスを提供する機会を増やす。三者面談や二者面談において、教師の考えを明確に伝え、指導の質を向上させる。

### 2 コミュニケーションの向上と理解の促進

生徒、保護者、教師間のコミュニケーションを強化し、各立場の期待や目標への理解を深める。また、生徒が自己の目標や振り返りを行う場を設け、それを共有することで、相互理解を促進する。

### 3 キャリア教育の推進

生徒が将来について考え、計画を立てられるよう、キャリア教育を充実させる。目標達成に向けた計画の立案や時間管理のスキルを指導する授業を実施し、主体的な進路選択を支援する。

### 4 デジタルツールの活用

フォーサイト手帳の活用を推進する。紙の手帳に加え、クラウドサービスを活用したデジタルツールを導入し、生徒が柔軟に日々の記録を管理できるようにする。さらに、生徒の学習活動や生活習慣の記録を教師や保護者が閲覧し、フィードバックを行う場を意図的に設定する。

### 5 文章表現の機会の設定とフィードバックの強化

生徒が自分の考えを文章で表現する機会を設け、適切に評価し、フィードバックを行う。指導の効率化を図るため、AIを活用し、生徒自身が評価を受けられる仕組みを導入する。具体的には、AIに文章や音声を入力し、評価を受けたうえで再度修正を行う取り組みを実施する。

### 6 主体的学習の促進と確認

スタディサプリを活用した主体的な学習を推進する。教師や保護者も生徒の学習進度や成果を隨時確認し、自宅学習や基礎基本の習熟を充実させる。

### 7 情報発信の推進

学校通信「桜梅桃李」やインスタグラムを活用し、学校の活動や方針、生徒の取り組みを隨時発信する。保護者への情報提供を継続し、学校と家庭の連携を強化する。

### 8 保護者の家庭学習に対する意識の醸成

家庭学習の充実を図るため、家庭教育学級においてワークショップや情報提供の場を設け、保護者の意識向上を図る。

### 9 校時程の見直し

現在の校時程を見直し、習熟の時間をさらに増やす。

### 10 地域社会への貢献と連携の継続

地域社会との連携をさらに推進する。地域行事や社会貢献活動への参加を奨励し、これらの活動を学習成果として評価する場を設定する。

A : 思う B : どちらかといえば思う C : どちらかといえば思わない D : 思わない

項目	A	B	C	D
<b>主体性</b>				
1 人に注意されず、何事も自分で正しく考え、正しく行動している。				
2 学校や地域に貢献しようとしている。				
3 学校の行事に自分から進んで取り組んでいる。				
4 自分の将来についてしっかりとと考えている。				
<b>協働する力</b>				
5 相手の考えを大切にしながら生活している。				
6 みんなと協力して学習や行事に取り組んでいる。				
7 誰とでもトラブルなく毎日の生活を送っている。				
8 自分も他者も大切にして生活している。				
<b>創造力</b>				
9 新しいアイデアや解決策を考えている（考えた）。				
10 都農町のためになることを考えている（考えた）。				
<b>情報活用力</b>				
11 教科書や資料を読んで、自分の考えをうまくまとめることができる。				
12 フォーサイト手帳（生活の記録）をしっかりと記録し、活用している。				
<b>自己調整力</b>				
13 目標に向けて計画を立てて行動している。				
14 時間を有効に使って生活している。				
15 提出物や宿題の期限を守っている。				
16 自分の生活を振り返り、改善しようとしている。				
17 授業にしっかりと取り組んでいる。				
18 家庭での学習（塾を含む）にしっかりと取り組んでいる。				
19 ルールやマナーをしっかりと守って生活している。				
20 体力を向上させることができている。				
21 感染症の予防を心がけている。				
22 災害時あるいは災害が起こりそうな時に、適切な避難行動をとることができ る。				
23 都農町のためになることを実践している（実践した）。				